「雁塔聖教序記碑・明拓本」

唐・永徽4年（653年）

図①　内題簽

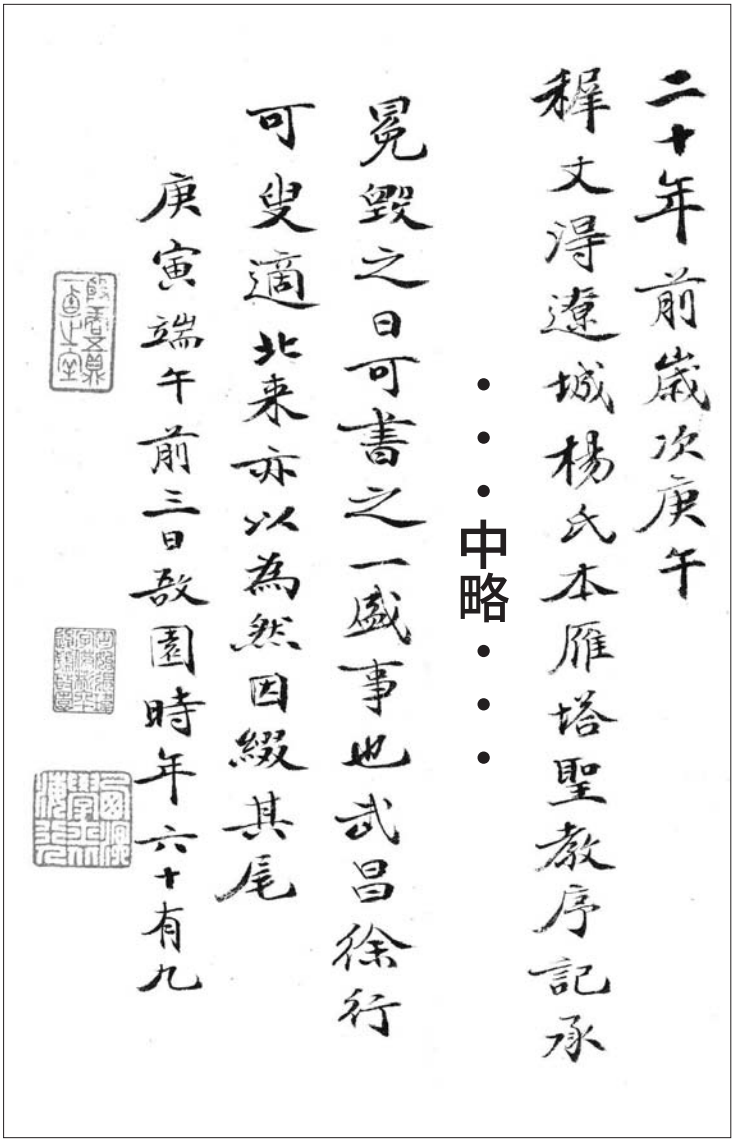
図②－１　「雁塔聖教序巻頭」

褚遂良の名筆とされる『雁塔聖教序記碑』は、序碑と記碑との二碑からなる。それぞれが西安の大雁塔のもとに安置されてある。書体は楷書であるが、両碑ともそれぞれが流麗な見事な抑揚のある点画であり、行書の様な滑らかな筆致を示している。初唐楷書の中で最も流麗な書であり、古典の第一に挙げられる。

ここに示した帖は、一頁三行、行あたり六字に装幀されている。擦拓による明代の旧本である。題簽は、許成琮（1882～1967字は稱簧、河南の人）という清末民国期の人物である。伝記によれば、幼き頃より書道が好きであり、生涯にわたり褚遂良を学び続けたと伝え

図②－２　（図②－１より続く）

図③　「張瑋の跋文（一部省略）」



られている。その書風は、「清秀隽逸」と評された。1949年に故宮博物院の研究員を務めた。この帖は、この許成琮の旧蔵本である。自らの本に自ら筆を執って、全く同じ書風の題簽を二種書いている。一は、木の封面（表紙）に、もう一は、その内側にある。図版に示したのは、内側の黄色を帯びた絹地に書かれた題簽である（図①）。実にすっきした柔らかい、いかにも雁塔聖教序を学んだ書風であり、見事である。跋文は、同時代の張瑋（1882～1968　字は效彬、敬園と号した。河南の人）という碑法帖の収蔵鑑定に優れた人物の筆である（図③）。所蔵者と同郷であり親しい関係にあった。張瑋の跋文の中に、その当時、中国の南北で褚遂良の書法を善くした二人の人物がいたと。南では、趙声伯であり、北では許成琮、貴方であると書いている。まさにこの評語にふさわしい見事な題簽である。

この欄に関するご批評、ご意見、ご希望、ご質問などをお聞かせください。私宛に直接メールで、また編集部宛にお送りただければ幸いです。

伊藤　滋　メールアドレス
mokkei@galaxy.ocn.ne.jp

書道芸術院
平成の群像（2013）

田村鄭雲

書作品の表現は感動から始まります。

私が書を志したのは、高校3年生の時。辻元大雲先生が私の通う高校に赴任され書道部の指導の際に、全紙2枚に大字を揮毫される師の姿を見て驚きました。それまでの、半紙に手本そっくりに書く書道とは全く異質な世界を感じ、こんなに情熱溢れ、迫力が伝わる書を表現できたら素晴らしいと、軽い気持ちでこの世界に足を踏み入れた次第です。

大学入学後、種谷扇舟先生に御指導を受け、何年も古典の臨書と展覧会の作品に取り組む毎日でした。とにかく先生の古典指導のカリキュラムをこなす事、休まないで各展覧会の作品を作るのがやっとの状態であり、何のために書を勉強しているのかを、考える余裕もありませんでした。

その後、扇舟先生と訪中の機会を得て、鄭道昭の碑を見た時は大変な感激で、書道を続けてきて良かったと感謝しました。それは扇舟先生から丁寧に鄭道昭の臨書のご指導を受けたからこそ、強烈に書の魅力が伝わってきたのです。

台湾の故宮で多くの古典の肉筆を鑑賞した際、体が震えるほどの感激を味わえたことも書を勉強した成果です。

第65回毎日書道展

書道を楽しいと思って取り組んだのは長い書歴の中で僅かかも知れません。振り返ると、何度か展覧会で賞を頂き喜んでいるうちに様々な資格や責任を担い、作品はいつも前回より良い作品、審査員として恥ずかしくない作品を書くことだけに気を遣っていた自分がいます。

この欄に寄稿するにあたり、自らの書に取り組む姿勢を見直してみました。

書を続けていくこと、真摯に取り組んでいくことは本当に大変なことです。経済面や体力的なこと、家庭の事情等、環境の問題で書を続けていけないこともあります。多くの書に取り組む方達は、何かを犠牲にしながら継続している筈です。

私はいつも書作の際に悩んでしまいます。斬新な発想や、書きたいという情念が湧かず、平素からの勉強の足りなさを歎きます。どうして良いか分からず、逃避したくなる自分がいます。

考えると、書くことでしか自分は表現出来ないし、昨日の自分に負けるわけにはいきません。人間が生きていく為の命題は絶えず自分と闘っていくことだと思います。いつもNextOne、次の作品こそが最高の作になるよう努力しています。（たとえ結果が伴わなくても。）

学生の頃に私が感じたあの感激を次の世代に伝えていく責任があるのです。そのために書道芸術院の指導者の役職を拝命いただいたと感じています。

書道芸術院の会員の皆様とともに、書の感動を広げていきたいものです。

書のひろば

理事長　辻　元　大　雲

SHO2 現代日本の書 代表作家100人展 書道芸術院訪仏団報告（続き）

10月の開幕に続き11月13日より19日まで、大雲団長、下谷洋子、小竹石雲両氏を含め書道芸術院会員17名の訪仏団がパリ、ギメ東洋美術館を訪れた。今回も3日間にわたるワークショップ、席上揮毫会と新企画の親子教室の指導をかねて、更に当初予定になかったパリ日本人学校生徒への書初め指導も加わり、連日多忙な日程となった。

11月13日未明羽田発、同日早朝パリ着。ここで大雲と小関瑞華さん（毎日書道会職員）はパリ日本人学校指導のためベルギー観光に向かう本団と別行動となった。翌日の日本人学校指導のためギメ美術館より指導用の用具を借り出し、筆・墨・紙など必要品を日本大使館濱島一等書記官手配の車で運搬。河部校長、佐藤教頭と打ち合わせを行った。

14日午前10時頃より小学3年生29名、4年生34名、計63名を合同で書初め指導。3年生は半紙に「光る」、4年生以上は半紙3枚版の書初め用紙で所定の課題を指導。書道用具が不自由な環境を考慮し用具類は全て毎日書道会で用意した。書初め用の大筆は広島熊野の一休園さんが150本提供して下さり感謝。書初め用紙1000枚、墨汁4Lは全て生徒及び学校側へ寄贈した。合同授業のため体育館を会場にギメより持参の下敷き5m×2m8枚を敷き詰めて行った。1時限45分の指導は大忙し。あらかじめ用意した原寸大手本を全員に配布、2限目の5年生19名、6年生20名計39名指導。午後は中学生1～3年生30名の指導も同様に行う。中学生は50分授業であったが、楷書と行書の両スタイル指導で繁雑を極めた。参加した生徒は大喜びで元気に練習してくれたことで報われた。皆礼儀正しくまじめな生徒ばかりで、教養の高さを感じた。来年1月の始業式後、本番の校内書初め大会を行い、校内展示されると伺った。練習の成果が楽しみである。

パリ日本人学校で書写指導

翌15日から17日はギメ美術館にて午前ワークショップ、午後下谷、小竹、大雲3名による席上揮毫を行う。17日は午前午後とも親子教室を開催。会場にあふれんばかりの参加者となり大賑わいであった。皆初めての経験であったが楽しく賑やかな書道教室となった。図録へのサイン会も催し、ギメ側からは館長始め皆さんから感謝のお言葉をいただいた。

団員の皆さんのご協力があったからこその催しであった。その他は本号特集ページの下谷、小竹両氏の報告をご参照いただきたい。

第65回記念全国学生書道展 搬入・審査終了

第64回展より書道芸術院展と併催となった全国学生書道展は10月31日搬入、半紙の部14392点、8374人、半切½の部1910点、1762人の応募があり、ほぼ前回並みのご出品をいただいた。半紙の部がやや減少し、半切½の部が逆に増加となり全体で微減となった。

今回は記念展となり「第65回展記念賞」を特別に設け、半紙の部10名、半切½の部5名、計15名をA賞として増枠し、A賞は半紙の部110名、半切½の部35名、計145名が輝いた。11月7日にA賞選考委員によるA賞候補選考、翌8日には大野祥雲、下谷洋子、小竹石雲、小浜大明の各氏と種谷萬城審査部長、辻元大雲審査長によりA賞が決定した。B賞以下は9日10日に中央審査員による審査の上、事務処理まで行われた。

団体賞は半紙の部と半切½の部を合算して決定。全国優勝は大阪の竹扇会（小伏竹村会長）に輝いた。全国準優勝以下各賞も決定した。

来年2月16日より21日まで東京都美術館で開催される第66回書道芸術院展に併催される。表彰式は2月16日午前10時より、お隣の東京国立博物館平成館大ホールをお借りして、東博学芸員の講話を交え挙行される。

記念展のため入賞目録にはA賞入賞作品が全部写真掲載される。多くの方のご参観を期待したい。

院創立記念日講演会・懇親会開催

昭和22年11月23日に創立して以来66年の年月を重ねてきた本院は、毎年この日を記念して講演会と懇親会を催してきた。ここ数年は午前中に財団役員会（理事会・評議員会）を併せて開催している。本年は公益財団法人としての第3回理事会として上野精養軒にて開催。顧問・評議員もオブザーバーとしてご参加いただいた。

講演は独立書人団の貞政少登先生による「書へのいざない」と題して、師の手島右卿先生との数々のエピソード、書に対する情熱や心構えなど先生独特のユーモアを交え楽しく実りある1時間半であった。続いて行われた懇親会は200名余の参加者で大いに盛り上がった。

漢字(三)

崎井恵風

2011書道芸術院秋季展「魂」
崎井恵風書

21世紀の書
―私の主張―

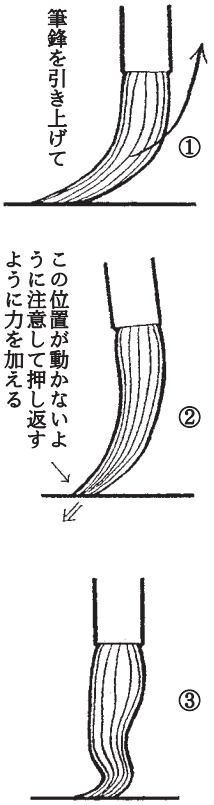
母の死　「魂」

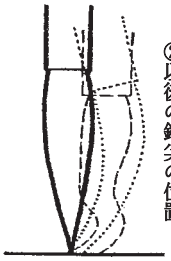
「春色」を出品した第64回書道芸術院展開催直前に、母は旅立ちました。書の道に進んだ私を誰よりも応援してくれた人でした。母に喜んでもらいたい一心で励んできたと申しても過言ではありません。10年前の毎日展会員賞受賞の祝賀会に出席してもらえたのが、せめてもの親孝行でした。遺品整理して見つけたのは、会員賞受賞の新聞記事の切り抜きでした。小引き出しの奥に大切に入れてありました。そんな母の魂の安かれと祈って書いた作品です。その年の秋季展推薦作家展に出品した一点です。113×205センチの紙面、不思議なほど筆が軽く動きました。

かな(三)

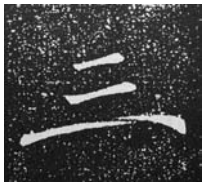
田子白嶺

書は線芸術とも言われ、全ての書美は書線によって生成される。「書」では、変化あるものを動きがあると言い動くものを「生きている」と言ったりします。書線も生彩があり、生命感を感じさせるものが良いと思います。書線の変化で太さの変化や濃淡の変化は表面的で確認は容易ですが、強さや深さの変化は内面的でわかりにくい。しかし線質を決定づける重要な変化です。毛筆の運動は垂直と水平の複合作用から成り、この両者は互いに反撥する性質がある。速く動こうとすれば上方向からの重圧が邪魔となり、これを除こうとする。筆圧をかけようとすれば速度が速いとかけにくい。速いと線は単調になり易く、また軽くなる傾向がある。筆圧がかけにくくなるからです。重圧を維持したままの状態で速く動くことができたとすれば、筆力、筆勢のある強い線となる。筆圧と速度の関係から鋒先と紙面の間で発生するまさつ抵抗の大小がそのまま線の強弱となり、速度の変化のリズムがそのまま線の変化のリズムとなったりする。筆圧は鋒の弾力によるもので鋒の先に力を加えます。古来から代表的な用筆技法に俯仰法、逆入平出法、三折法等がありますが、これらは全て鋒先と紙面の間で抵抗を発生させるための技法です。これが筆法の共通原理です。他にも抵抗を発生させる方法はあるので自分の方法で創作し、生命感、躍動感のある線を表現する、これを目標にしています。





●剛毛による俯仰法



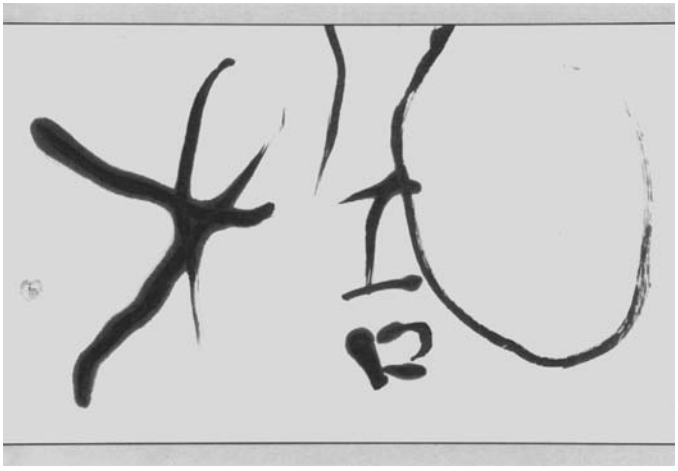
雁塔聖教序

SHO 2　現代日本の書　代表作家100人展

会　期 ＝ 平成25年10月23日㈬～平成26年１月13日㈪㈷
会　場 ＝ フランス国立ギメ東洋美術館

主催＝フランス国立ギメ東洋美術館・毎日新聞社・（一財）毎日書道会
後援＝在フランス日本国大使館

「捨」による造形



81.5×111㎝　　恩 地 春 洋

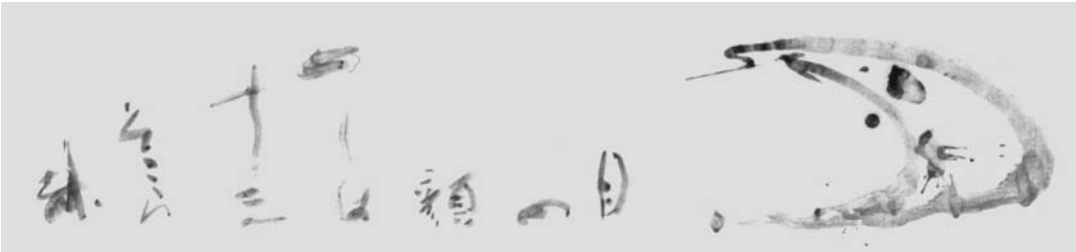
光・闇（部分）

35×70㎝　　辻 元 大 雲

暢（chō）

81×112.5㎝　　大 野 祥 雲

月雪花（部分 巻頭）



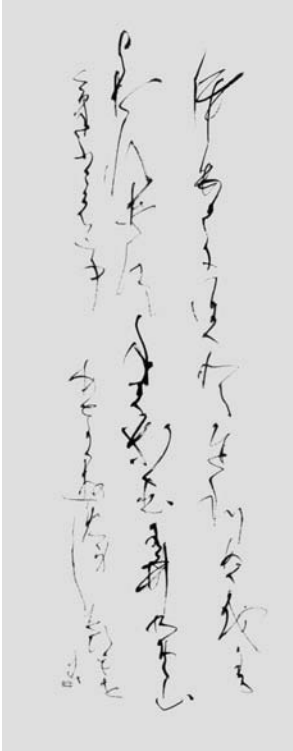
30×353㎝　　小 竹 石 雲

一如

板垣洞仙

147.5×64㎝

いろは歌



下谷洋子

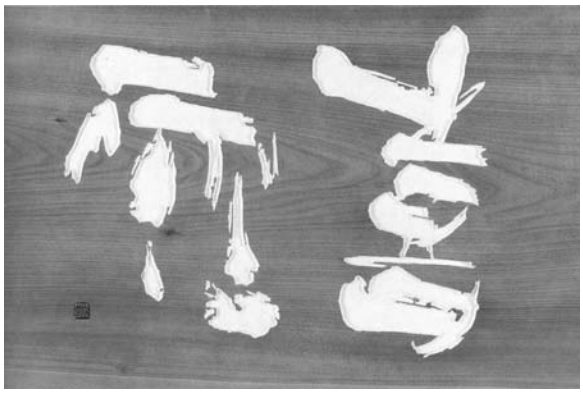
137.5×53㎝

楽書飲

種谷萬城

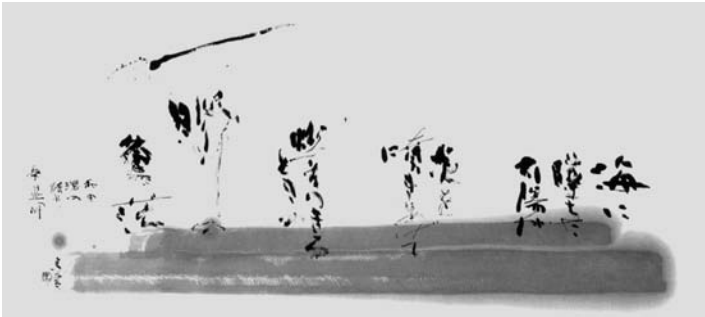
138.5×58㎝

喜雨



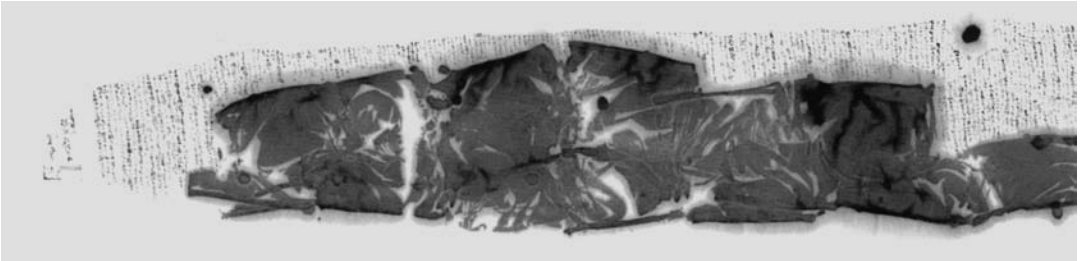
40×60㎝　　後藤大峰

竜飛岬



63×142.5㎝　　坂本素雪

鎮魂・銀河鉄道の夜



31.5×308.5㎝（部分 巻末）　　千葉蒼玄

（部分 拡大）

書道芸術院
現代日本の書・代表作家パリ展
於：フランス国立ギメ東洋美術館

バルセロナとマドリッド・パリ

報告　下谷洋子

10月19日（土）成田組22人、成田空港午前11時45分、ロンドンヒースロー空港に向け出発。ヒースローで乗換え、バルセロナ着22時05分（現地時間）。日本から約14時間半、時差7時間（サマータイム）。

10月20日（日）午前は、バルセロナ市内観光。カザ・パトリョ邸、バルセロナのシンボル、サグラダ・ファミリア聖堂、グエル公園。午後はバルセロナ近郊のモンセラット（のこぎり山の意）へ。ベネディクト派修道院の見学。

10月21日（月）時速300㎞のスペイン新幹線AVEにて3時間、マドリッドへ移動。プラド美術館、スペイン広場、王宮などを回る。夜はフラメンコショーで英気を養う。

10月22日（火）空路にてパリに入る。モンマルトルの丘、バラ窓のステンドグラスが美しいノートルダム寺院など周遊後、ギメ東洋美術館開幕式に参加（待機組は作品見学）。終了後、混雑の中カクテルパーティーとなる。

10月23日（水）市内観光（エッフェル塔、ルーブル美術館など）後、辻元理事長を団長とした毎日の訪中団で組織された大一丸倶楽部の『パリの街に書を飾ろう』展を拝見する。次に今回のハイライト「温泉銘」の特別見学に国立図書館旧館に回る。2名1組、約2分、緊張のひと時。夜はウエスティンパリバンドームにて訪仏総勢520名余の大祝賀会が行われた。

10月24日（木）出発まで自由行動（下谷はギメ東洋美術館での席上揮毫）。パリ発19時30分、帰国の途に。

10月25日（金）成田空港着14時20分、全員無事帰国。お疲れ様でした。

ベルギー周遊とパリ7日間

報告　小竹石雲

辻元大雲理事長が実行委員長を勤められたパリ展に、理事長を中心として本院から17名の参観団が、ワークショップ、席上揮毫を兼ね、11月12日～19日までベルギーとパリを訪れた。

12日夜11時半に羽田空港に集合、13日早朝パリ着。パリの日本人学校より書写指導の要請があり、辻元先生と小関さんはパリ滞在。他の人達は空路でブリッセルへ。全員のスーツケースの積み忘れと言うハプニングがあったが、ゲント・ブルージュ見学中、無事到着し一安心。翌日ブリッセルの市内見学後列車でパリに移動、辻元先生達と合流。翌15日、午前中国立ギメ東洋美術館での100人展の参観とワークショップの見学。20名位が座して書けるようにセッティングし、ワークショップの開始。事前に準備された辻元先生の資料が掲示され、それをもとに書体の変遷、基本点画の用筆法、執筆法などの解説が懇切丁寧になされた。その後先生の用意されたお手本の中から好きなものを選び実体験。筆先に気持ちを込め、集中しての作品制作では言語の違いを越えての交流ができた。最後に自作を持っての記念撮影。熱心な質疑応答もあり、時を忘れてのワークショップだった。午後からは席上揮毫をするグループと観光に向かうグループに別れる。席上揮毫では辻元先生が漢字、下谷洋子先生が仮名、私が近代詩文書を担当。辻元先生は、楷・行・草・隷で書き分けられ、最後にご自身の作風でまとめられた。漢字独特の文字造形の魅力が揮毫風景を通し理解が深まったように感じられた。下谷洋子先生は日本独自仮名美の「散らし書き」が変体仮名を交えて揮毫。又料紙と歌とが一体となった美しさもうかがい知ることができた。私は日本の言葉表現を墨色の変化を通して、濃墨・淡墨とで書きわけた。滲み、淡墨の美しさに興味をもっていただけた。翌日も同様、午前ワークショップ、午後席上揮毫を行なった。ネットで知ったと言うドイツからの人、老若男女、大勢の人達の参加をみた。翌17日我々は「親子教室」と言う体験学習の指導にあたる。各自好きな言葉を半紙に練習し、最後に色紙に清書。使用した筆はプレゼントされ、親子の仲睦まじさはほほえましいものだった。夕食は観光したグループと共に、セーヌ川のディナークルーズで旅の最後の夜を楽しんだ。翌早朝パリ発で帰路。19日朝羽田空港に到着。全員無事に家路

に着く。

最後に、ギメのマカリウー館長より今回の書展の実行委員長を勤められた辻元先生の貢献を高く評価されていたことを通訳でありこの書展を支えてこられた足澤様より披露された。先生のご苦労に改めて感謝を申しあげたい。そしてワークショップと席上揮毫の準備に献身的にお手伝い下さった若手の参加者にも同様感謝の気持ちで一杯。

会場で朝比奈毎日新聞社長に作品解説をする辻元理事長（10月）

豪華絢爛なウェスティンパリでの祝賀会（10月）

ノートルダム寺院をバックにスペイン・パリの旅参加者（10月）

ギメ東洋美術館でのワークショップ（11月）

ギメ東洋美術館内書展会場（10月）

パリ日本人学校で書写指導（11月）

ギメ東洋美術館でのワークショップ（11月）

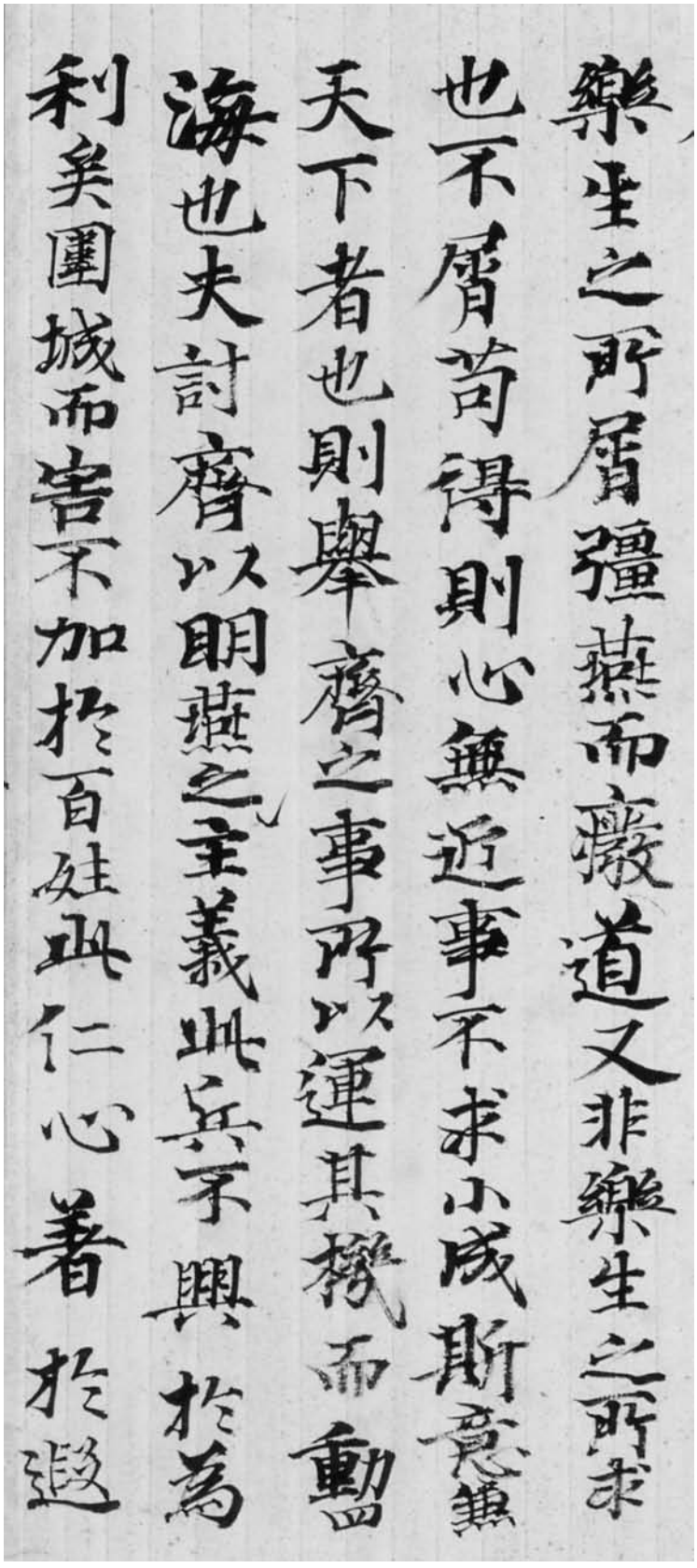
楽毅論（光明皇后）③

漢字研究部臨書課題 ＝（半紙普通判・縦使用）左記の法帖より何文字臨書してもよい。

特別研究部臨書課題 ＝（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）左記の掲載以外も可。

※落款を必ず入れる
署名、もしくは○○臨
（押印のみも可）

〈解説〉
本紙は全面に裏側からへらのようなもので空罫（からけい）を引いた、いわゆる縦簾紙（じゅうれんし）であり、書写にあたっての配置に大きな助けを成したと思われる。奈良時代の宮廷に王羲之の書法が盛行したことを物語る貴重な書道史の資料でもある。（編集部）



樂生之所屑彊燕而廢道、又非樂生之所求也。不屑苟得、則心無近事、不求小成、斯意兼天下者也。則舉齊之事、所以運其機而動四海也。夫討齊以明燕之主義、此兵不興於為利矣。圍城而害不加於百姓、此仁心著於遐

古筆鑑賞

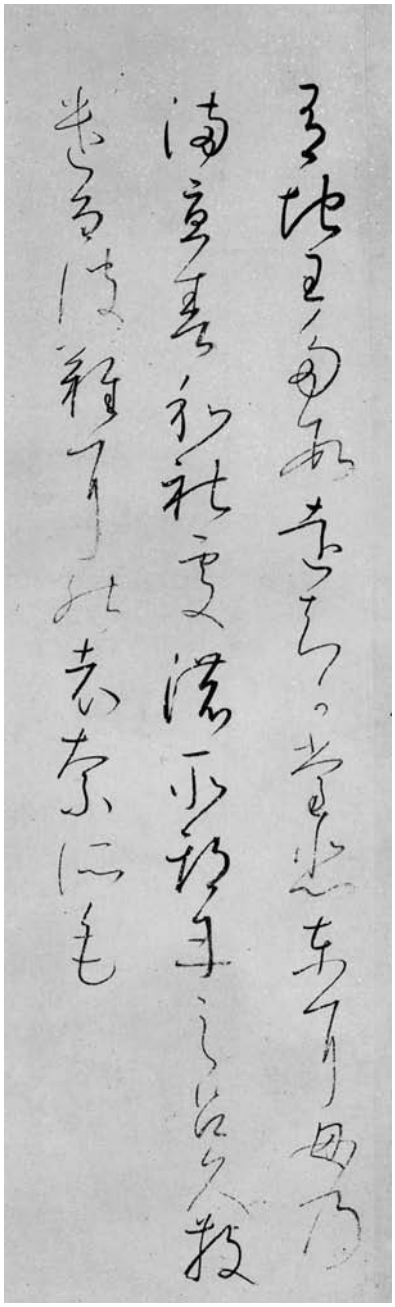
高野切第三種（伝紀貫之）③

⑰

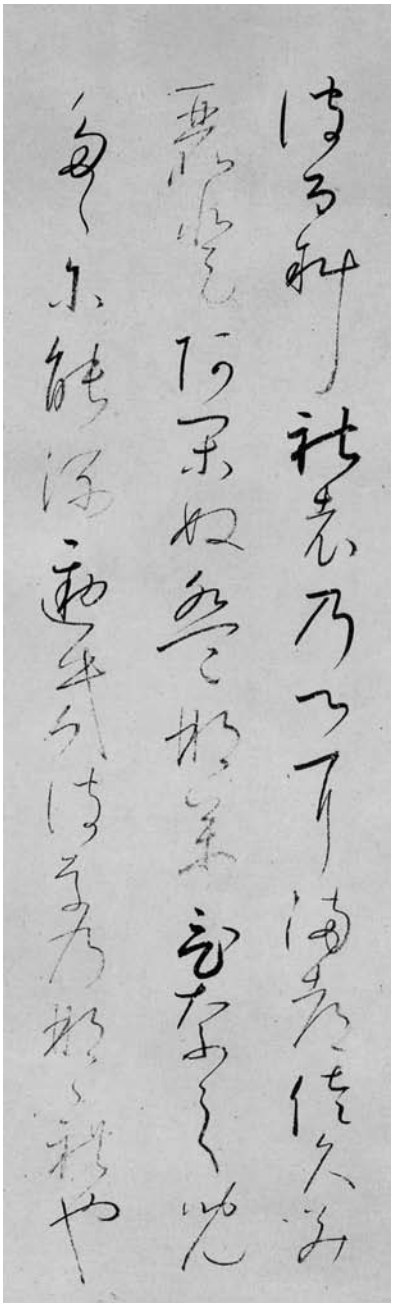
〈よみ〉

有地王多敢遣知可堂懸東耳母乃
うちわたすをちかたびとにもの
満憂春和礼慮濃所期丹之呂久散
まうすわれそのそこにしろくさ
遣留波難耳能者奈所毛
けるはなにのはなぞも

波留斯礼者乃部耳満都佐久美
はるさればのべにまづさくみ
麗登阪閑叙盤那萬飛奈之見
れどあかぬはなまひなしに
多尓能流遣幾波奈乃那雞也
たゞにのるべきはなのなゝれや



（70%縮小）



（70%縮小）

〈解説〉

第三種の書風の全体観は、清新で知的な冴えが感じられる。用筆は直筆が基本で、単純化した字形に癖はない。線条は流麗でよく暢達しているが、第一種に比べると変化は少ない。運筆は速く軽妙で、しかも緊張をともなって格調高く進む。かなとしては、高野切の三種類の内、最も発達した姿を示している。

書式は、歌の題及び詞書（ことばがき）は和歌より一～二文字下げて書きはじめ、作者名は下の部分に置き、和歌は二～三行で書いている。大部分が女手（平がな）が中心だが、一部草がな（変体がな）だけで書いた個所があり、これは、第三種の筆者が巻子全体に新鮮味を入れるために意を配ったかと思われる。（編集部）

※今回は、紙面の都合上、和歌のみを掲載しました。

かな研究部臨書課題

- 競書作品は、左の古筆の掲載部分より**歌一首以上を書く。（全臨も可）**
- 用紙は**半紙普通判（料紙可）**
  〈**たて長**に使用〉
  別紙を裁断して貼付も可。
  半懐紙は半紙サイズに切って使用のこと。

特別研究部臨書課題

- 毎日展公募サイズ以内・縦横自由
- 左記の掲載以外も可

※落款を必ず入れる
署名、もしくは
〇〇臨
（押印のみも可）

漢字規定　初段以上【一月十五日締めきり】用紙　半紙普通判

大野祥雲選書

萬物之逆旅　よみ（萬物の逆旅）

書体＝自由

習い方解説（三）

大野祥雲

萬物之逆旅（萬物の逆旅）　（李白）

天地の間に、万物はつぎつぎと生まれ、つぎつぎと消えていく。あるものは来たり、あるものは去り、たえず天地の間を往来している。つまり天地は万物を宿泊させる宿屋のようなものである。と李白は言っている。

「萬」上部はやや細めで密。下部は広くして白を取ると、明るく落ち着く。

「物」偏と旁の譲り合いに気をつける。旁は大きくし、風通しをよくする。

「之」簡単な文字だが、深い線で書きたい。最終画は堂々と押し出していく。

「逆」結構がむずかしい。「辶」の上に屰が安定して乗っかるように。

「旅」この文字には左右の払いが多いので、長短と方向に気をつける。

漢字規定 秀級以下【一月十五日締めきり】用紙 半紙普通判

名越蒼竹選書

雲龍風虎 よみ（雲龍風虎）

書体＝楷書

習い方解説 (三)

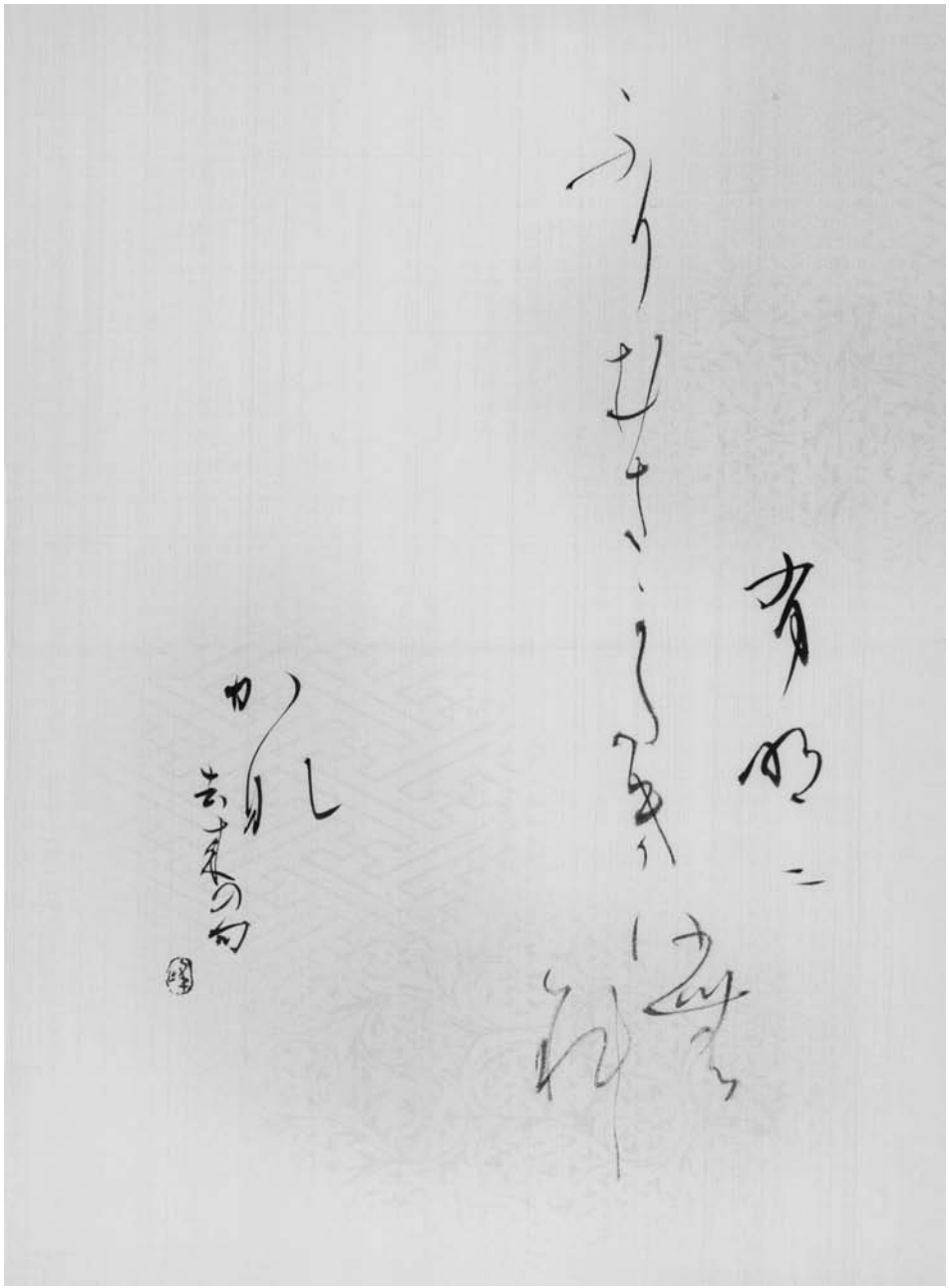
名越蒼竹

雲龍風虎（雲龍風虎）（易経）

今回は唐時代からさかのぼって北魏時代の書風としました。張猛龍碑あたりをイメージしています。北魏の楷書は主として方筆（角ばった点画を表現する筆使い）で書かれています。唐時代と比べると一般に起筆の角度がきつく収筆より重くなっています。ハネやハライもすぐに力を抜きません。縦画より横画が強く書かれるのは隷書の影響でしょうか。点画のリズムも（トン・スー・トン）ではなく、（トン・スー）の二拍子です。「雲」「龍」「虎」は今の活字体とは異なる書写体を使っています。

かな規定　初段以上【一月十五日締めきり】用紙　半紙普通判（料紙可）

平川峰子選書



よみ方　有明に(二)ふりむき(支)が(可)た(多)き(幾)さ(沙)む(無)さ(斜)かな(那)　去来の句

創作

習い方解説 (三)

平川峰子

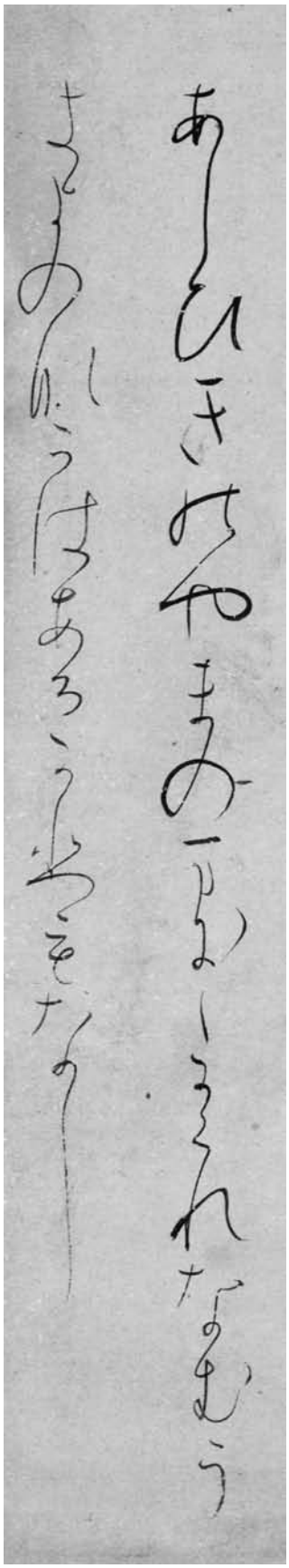
有明にふりむきがたき寒さかな
（向井去来）

俳句の作品は特に余白を考えて構成したいものです。

一般的に書作品を観るとき、一番に文字を読みます。しかし、余白にも注意を注がなくてはならないのです。余白は文字を書けば自然にできますが、それは充実していなければなりません。充実したように感じられない作品はたいていは鑑賞に値しないものなのです。それほど余白は大切なものであって、その文字の中や文字と文字の間にも存在し、その形や数の相違は書いた文字とあいまって、書作品がかもし出す雰囲気を左右します。ではその余白の充実を出すにはどうすれば良いのでしょう。長い道のりではありますが書作品に限らず多くの芸術品を直接観て味わうことではないでしょうか。

かな規定　秀級以下　【一月十五日締めきり】 用紙　半紙タテ1/2（料紙可）（たて32センチ・よこ12センチ）

掲載写真のうたを全臨、または部分（二字以上の連綿）を臨書する。



高野切第三種
（掲載写真縮小93％）

よみ方　あしひきの(能)やまのま(万)に(尓)〳〵か(可)く(久)れなむう
き(支)よのな(那)か(可)はあるか(可)ひ(悲)も(毛)なし

かな条幅規定【一月十五日締めきり】 用紙　小画仙紙半切（料紙可）

善養寺紅風選書

よみ方　冬籠(ふゆごもり)こゝ(こ)ろ(路)のお(於)く(久)の(能)よ(與)しの山

創作

習い方解説 (三)

善養寺　紅　風

冬籠(ふゆごもり)心の奥(おく)のよしの山(やま)
（与謝蕪村）

行の流れは、大切な要素です。短い行を添えて一行に見せる構成です。両者が離れないよう伸縮しながら中心移動に注意して書いて下さい。

冬籠(ふゆごもり)、送りがな「り」を入れるのもあります。

※たて形式に限る

漢字条幅規定　初段以上【一月十五日締めきり】用紙　小画仙紙半切

牧　泰濤選書

晨焼樹下霑霜葉　夜煮山頭瀉月泉
（晨には焼く樹下、霜に霑うの葉。夜は煮る山頭月に瀉ぐの泉。）

書体＝自由

漢字条幅規定　秀級以下【一月十五日締めきり】用紙　小画仙紙半切

竹本龍汀選書

少年易老學難成　一寸光陰不可輕
（少年老い易く学成り難し、一寸の光陰軽んずべからず）

（朱熹）

書体＝自由

習い方解説 (三)

牧　泰濤

筆は自分で造る。筆を使い込むということです。今号は羊毫中鋒で書いた。羊毫一万字――といわれます。自分の思いの線を画きたければ、鋒芒がスリ切れるまで鍛錬することです。鋒芒がチビた時ぐらいが私は好きです。「筆塚用の古い筆ありません？」。冗談じゃない。新品ならありますけど…。約千本の大小の筆を所有。筆は皆、愛筆です。

習い方解説 (三)

竹本龍汀

今回は7字句2行書です。字画の少ない字は小さく、字画の多い字は大きく自然に書いてみました。墨継ぎは墨継ぎ同士、かすれはかすれ同士、引き合ってまとまろうとします。文字の大小と墨継ぎに注意しながら文字の中心が通るように気脈に注意して書いてみましょう。1行と2行の2本の柱が呼応するように工夫して紙面全体の変化と調を学んでみましょう。

ペン字規定【一月十五日締めきり】

三浦鄭街選書

顔真卿の作品で現在知られるものには
楷書碑が多く、それぞれに特徴があり
「一碑一面貌」と評される。行草書では
「争坐位稿」「祭姪文稿」「祭伯文稿」の
三稿が有名である。　○○書

用紙＝はがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体＝自由

習い方解説 (三)

三浦鄭街

先月に引き続き、長文に挑戦してほしいと思います。ペン字作品も、じっくりと時間をかけて丁寧に取り組んでみてください。

このペン字を担当して3回目。言葉の難しさを感じているところです。何気なく普段使っている言葉使いが、その場面に合っているかどうか、文章選びに迷いはじめたらキリがありません。全てが勉強であると思い取り組んでいます。

題材は、中国唐代の顔真卿に関する皆さんよくご承知の内容です。行書で表現してみました。

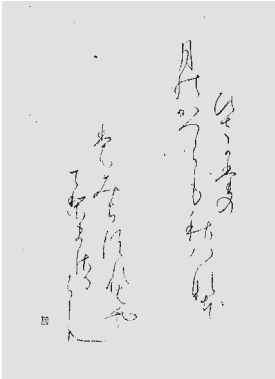
※**落款**を必ず入れる。
（**自分の名前**を入れること）

今月のホープ作品各部総評 NO.630

かな部　師範　森　直子

一切無理な線がなく、穏やかな運筆の醸す世界は安らぎがあります。古典研究の成果でしょうか？

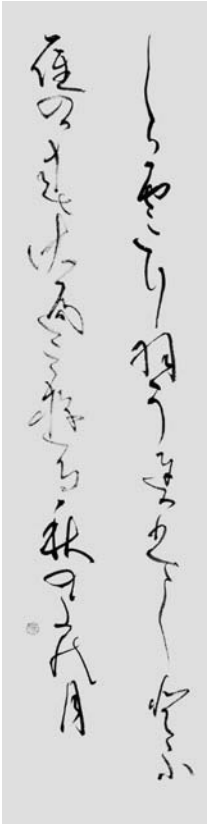
◎かな部総評　手本の拡大ができない一部を除き、線の強い古典美ある作品が多く好ましい。更に個性ある創造を期待する。（明子評）



かな条幅部　師範　小林　嘉江

参考手本に則って丁寧に運び、ぼかしの用紙に潤渇も映える。少々硬いので、更にリズムの工夫を。

◎かな条幅部総評　素紙は流れが出しにくいので注意。慣れない方は無理に創作せず、参考手本を基にリズムをつかみたい。（洋子評）



前衛書部　特選　野口　加奈

沈着した運筆と滲みが線に立体感を出している。空間が広がり明るく温かい作である。

◎前衛書部総評　大胆な構成と感情表現が一致した作が多く見られた。なお一層の努力を。（蓮紅評）

現代詩文書部　特選　銭谷　雪蘭

作者の書に対する情熱が聞こえてくる。悠々大胆な中に繊細さが有り筆法も堂々として好感が持てる。

◎現代詩文書部総評　技術のある方が多い。筆、紙、墨の工夫をし、レベルを上げましょう。（鄭雲評）

漢字条幅部　師範　松田　藍華

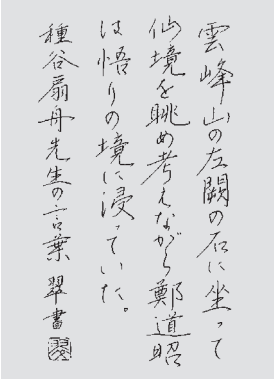
長脚スタイルの篆書2行で安定感ある作。鶏毛筆使用か、暢びやかな渇筆がリズムを奏でる。

◎漢字条幅部総評　上級2行書きは安定作多し、草書作はやや力不足。下級1行書きも5文字で安定するが意欲作がほしい。（大雲評）

ペン字部　師範　金井みどり

行書の流れるようなリズムが柔かい線となって全体を統一している。落款まで一貫して見事である。

◎ペン字部総評　横広の文字が多いせいか固くなった作が多かった。楷書はあまり入筆に力を入れ過ぎないことが大切である。（蒼玄評）



漢字部　師範　種谷　森城

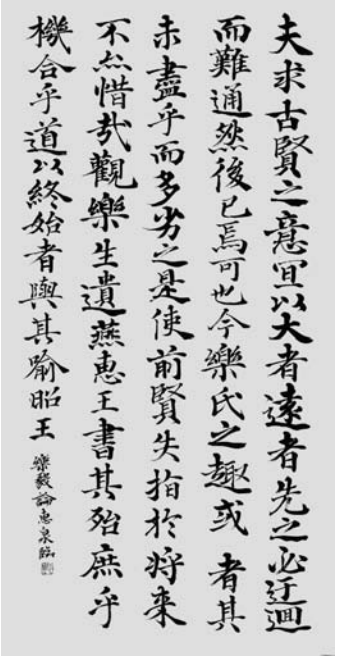
帛書風の書美を極めたと言うべきか。一瞬の生の輝きが一点一画に表現された。黒と白が美しい。

◎漢字部総評　上級参考手本は初段からが対象となっている。それぞれの段に応じての工夫がほしい。（翠風評）

今月の

特別研究部優秀作品（特選）

臨書（大雲）　阿部恵泉「光明皇后楽毅論」



136×70㎝

阿部恵泉臨

◆小画箋全紙に原帖のスタイルをバランスよく表現している。鋭いリズム感ある線質も自然でよい。（大雲評）

◆光明皇后の臨書というより王羲之の風を取り入れたようにも思われる。字形が安定し過ぎた感もある。（蒼玄評）

◆先ず、気脈の貫通に敬意。形臨に徹し、文字の大きさ、余白の取り方なども巧く配して眼力も高い。（洋子評）

◆紙面から筆の動きをうながすような体の動き心の動きを感じさせてくれる一画一画力強い表現。（倫子評）

かな（卯月）　栗原信子「柿の花」

180×53㎝

栗原信子書

前衛書（行徳）　浅見由紀子「はじまり」

149×71㎝

浅見由紀子書

◆ぐいぐいと喰い込む様に筆を動し移動して行く様を見せてくれるが、墨色が暗い感じがする。一考を。（倫子評）

◆上部の大胆な運筆が大きなリズムを奏で、下部の余白へ響く。下部やや混みすぎか。更に工夫を。（大雲評）

◆機関車の音を感じさせる力強い動きで視覚というより五感に響く作品。後半、左に少し余裕がほしい。（蒼玄評）

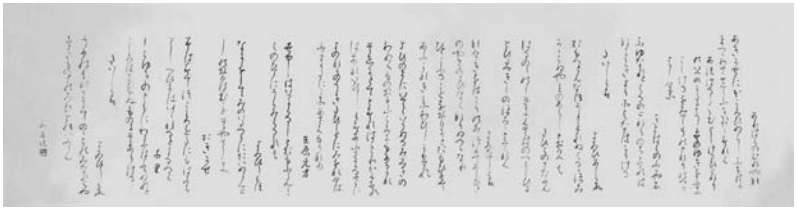
◆直線の構成で組み合わせ、白の使い方が目を引く。下部の線がやや甘く、墨量の対比も気になる所。（洋子評）

◆大らかな動きで最後までリズム豊かに見させてくれる。ひきしまった所もほしいがそれはまた別の世界か。（蒼玄評）

◆スケールを感じさせる大字がなで、屈託のない大らかさがよい。速筆のため線が少々単調、精進を！（洋子評）

◆しっとりとした筆の動き、よく見ていくうちに、その中に激しい線の変化が表れて紙面を引きしめている。（倫子評）

◆左上部から右下への展開が面白い。右下後半やや線が甘かったか。運筆のリズムの大きさを買う。（大雲評）



工藤山房臨　　35×135㎝

臨書（若葉）　工藤山房

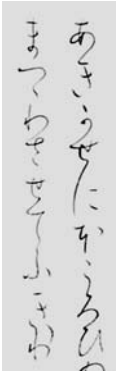
「高野切第三種」

◆書き慣れているのか、伸びやかに運びながら、一点一画、かなり精緻に臨んでいる。筆先の動き白眉。（洋子評）

◆よどみなくすんなりと目に映り快い臨書である。潤渇濃淡もあり平安の雅な世界を上手に表現した。（蒼玄評）

◆三種は習い始めに取りくみしっかり勉強するようにと。だが習えば習う程難かしい。よく纏められ敬服。（倫子評）

◆高野切三種の清澄な線質と形状をよく観察し、臨書としての水準は高い。更に創意ある表現へと期待。（大雲評）



拡大

◆羊毫の柔らかさを生かし光明楽毅論の変化とリズムをよくとらえている。全体のまとまりはもう一工夫を。（大雲評）

◆筆をとられるような紙質と墨の濃墨を旨く調和をとって表現され動きがあるが、気の抜けた所も。（倫子評）

◆濃墨・長鋒羊毫のため、深みのあるリズムが出て、味のある楽毅論となった。字間が広く少々散漫。（洋子評）

◆柔かい羊毛の筆を使いながら紙背に通るような強い線を表現した。光明皇后の字形のゆがみは今一歩か。（蒼玄評）

現代詩文書（もくせい）　西川藤象

「大峯あきらの句」

西川藤象書　　135×69㎝

◆木筆使用か。茶淡墨のにじみと破筆による渇筆が変化を紙面に与え、ほのかな情感を漂せて妙。（大雲評）

◆全体の雰囲気から体を動かしたくなるよう。書く姿勢もそのリズムを上手に表現されている紙面！（倫子評）

◆潤の線と破筆を使い空間を圧している。左右対称な文字に一考を要す。が全体のまとめは的を射て可。（蒼玄評）

◆起承転結のバランスよい構成だが、渇筆の大らかさと潤筆の暖かさで響きの高い作品となった。（洋子評）

臨書（白珠）　相内珠莉

「光明皇后楽毅論」

相内珠莉臨　　135×35㎝

総出品点数 69点

創作の部（39点）
漢字―9点
かな―3点
現代―14点
篆刻―0点
前衛―13点

臨書の部（30点）
漢字―27点
かな―3点

〈特選候補者〉

（創作の部）

「漢字」
墨宣　鏑木　梅道
AI　清水由紀子
恵雅　板橋　雅邦

「現代詩」
もく　森田　藤谷
鳳鳴　後藤　美希
陽陽　岩崎　陽光

「前衛」
白珠　高原　梨秀
秀恵　阿部　雅悠
四谷　野口　加奈

（臨書の部）

「漢字」
大雲　江本　興舟
英峰　佐藤　桂香
英峰　渡邉　多佳
竜泉　小林　洋龍

漢字研究部
（楽毅論）

選評　竹田尚堂

今月のホープ作品

奥川麗流

漢字研究部　特選　奥川　麗流

「光明楽毅」の強靭な筆勢、ひたむきさがよく表出されています。起収筆、転折の用筆が的確で、筆の機能を充分に引き出した緩みのない運筆によるのでしょう。この力量ゆえ敢えて申せば「亻」が具わっていればと。

◎漢字研究部総評

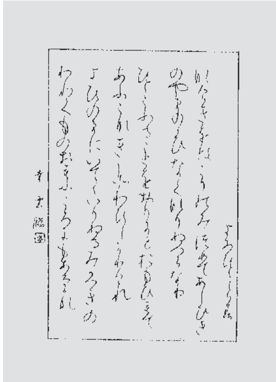
特選上位作は用筆の特徴をよく捉え、皇后の高揚感をも感じる作がある一方、原本の神経を鋭くしての観察を望みたい作も多数でした。武蔵の謂を借りれば「見」でなく「観」で。真蹟本で、至る処に用筆の糸口を見せてくれています。起筆前の筆の動き、打込みの角度と形、転折、趯（はね）の形は注意深く観ると大きな手懸りです。それによって生じる勁い書線と響きの高さを獲得したいものです。「求」の「冫」欠落多く注意を。

里美　狐泉　祥无　路子　喜子　智里　美恵子　麻美　晃代　龍月　博舟　観　皐　雅芳　梨秀　煌泉　由香　寛子　真智子　良子　雅悠　藤蓮　理恵　炎秀　淑子

かな研究部
（高野切第三種）

選評　善養寺　紅　風

今月のホープ作品



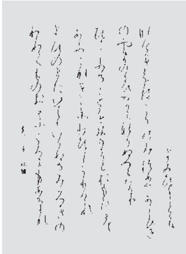
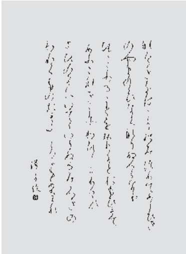
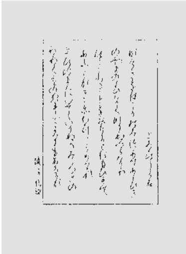
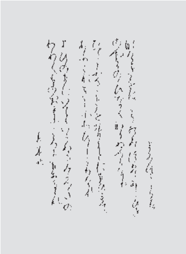
堀　切　幸　雲

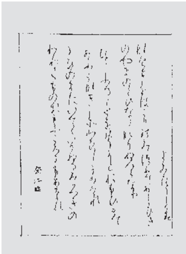
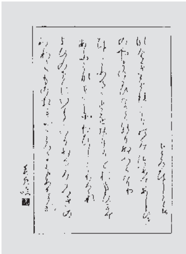
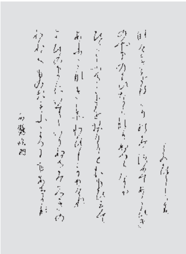
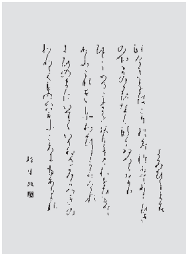
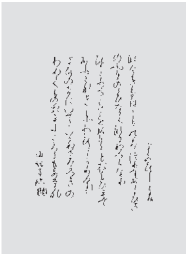
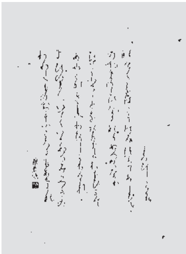
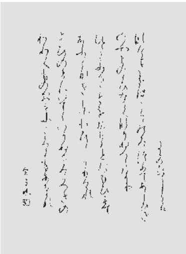
かな研究部　特選　堀切　幸雲

無理のない滑らかな流れは自然で、この古筆の特徴である軽快流麗な運筆を見事に倣（なら）っています。正確で格調高い作品になりました。

◎かな研究部総評

親しみやすい古筆だけに、総体的によく出来ていました。線の変化は書くスピードやタッチの強弱によって生じます。リズミカルな運筆を心がけて下さい。

英子　紅咲　幹生

洋子　登江　由紀子

優子　美恵子　雅泉

春華　千鶴子　令子

かな研究部成績表

特選

- 大雲　堀切幸雲
- 正華　伊藤英子
- 玉松　星野紅咲
- うる　飯高幹生
- 有秋　石川洋子
- 高崎　矢口登江
- AI　清水由紀子
- 蘭鼎　川崎優子
- 蒼陽　込山美恵子
- 竜泉　高橋雅泉
- 澄春　宇田川春華
- 明漢　吉田千鶴子
- 上泉　山縣令子

秀作（50音順）

- 奥田　小林純風
- 高崎　根津飛龍
- 紅瑤　鈴木智広
- 書泉　都丸みどり
- 清月　江田茂夫
- やま　山口律子
- AI　藤村昌子
- 洞書　濱田竹雪
- 英峰　吉瀬彩雨
- 若松　菅沢百合子
- 竹扇　山村炎秀
- 生大　北又春峡
- 秀畝　浅野千鶴子
- 椿翠　安藤美代子
- 誠和　石崎甘雨
- 大雲　礒貝清耀
- 華祥　板垣青鳳
- 八戸　市川紫泉
- AI　伊藤寿子

佳作（50音順）

- 高真　岩上郁子
- こだ　梅原虹祥
- 高井　榎田和子
- 安波　小野寺久美
- 竜泉　加藤龍恵
- 大雲　河合和敬
- 福山　川崎綾美
- 生大　菊池善高
- 若葉　工藤山房
- 大雲　高武玄城
- たか　河野白篁
- 翠吟　近藤閑窓
- 樹原　近藤淑子
- 竜泉　後藤良泉
- 高崎　酒井恵子
- 弘舟　渋谷由美子
- 紅瑤　須田香舟
- 高陵　住吉和子
- 竜泉　泉水龍宝
- 澄春　高橋幸苑
- 立精　千田白香
- 秀水　富澤理惠子
- 上泉　中尾恵子
- 一葦　中村一琴
- 秀畝　長島一水
- 書泉　西巻サト子
- 樹原　早坂梅艸
- 華仙　前川栄子
- こだ　宮川洋子
- 硯水　宮澤草秋
- 東伯　山本真紀
- 昌苑　吉田翠綾
- 京橋　吉田佑子
- 洞書　安藤楊風

入選（50音順）

- こだ　五十嵐佳栄
- 上泉　池田美子
- 正華　石橋知子
- 誠和　市川順子
- 澄春　宇井楠麗
- たか　梅津佳代子
- こだ　大石星祥
- 上泉　大沢淑江
- 玉松　小川彩香
- 華祥　加藤雅芳
- 竹扇　河岡星扇
- 高崎　北村欣子
- 正華　木原輝子
- 大雲　黒柳竹葉
- 大阪　後藤喜萩
- 竜泉　後藤美知子
- 蕙書　坂本里美
- 春汀　佐々木和子
- 湘南　佐藤詠子
- 昌苑　佐藤初香
- 八生　篠田恵美子
- うる　篠原楊流
- 祥紫　杉田睦子
- 華仙　鈴木智恵
- やま　田玉哲子
- 佑希　田中梢翠
- 翠柳　近池柳芳
- 泉会　辻洋子
- 秀水　寺澤悟子
- 千葉　戸村博舟
- 石舟　内藤古塘
- 土気　西澤瑠美
- 玉川　野中喜子
- たか　浜野永篁
- 前橋　春山勝美
- 千葉　平山彩華
- 蓮紅　本田美雪
- 書径　前田幸子
- もく　森田藤谷
- 五葉　森田睦子
- 竜泉　森田龍博
- 玉川　谷知裕美子
- 竹扇　柳隆扇
- 華祥　山崎桜江
- 幸扇　山本梅香
- 蓮紅　遊佐紅雅
- 風書　遊佐香風
- 竹美　横山蘭舟
- 如月　綿貫智子
- もく　青木藤漣
- 素雪　秋元知悳子
- もく　新井藤雪
- 琇韻　荒木洋子

- 遊雲　池田尚古
- 岩沼　石崎正子
- 生大　石橋ひさ子
- NH　伊藤良佑
- やま　伊東京子
- 石習　犬飼道石
- 和平　井上英二
- 千葉　猪又理扇
- 玉川　今井花枝
- 秀明　岩崎洋子
- 陽陽　岩崎陽光
- 澄春　岩瀬祥園
- 久賀　岩渕祥苑
- 誠和　鵜澤琴舟
- 前橋　碓井弘
- AI　生方由美子
- 高真　梅山久子
- 椿翠　遠藤珙楽
- 渡辺　大沢淳子
- 秀明　大森喜代
- 澄春　小川輝峯
- 玉藻　荻原玉藻
- 青峰　鹿島裕子
- ここ　加藤翠陽
- 秀水　門脇信子
- 鬼高　神田典子
- 東向　菅野静代
- 詢扇　工藤香蘭
- 広島　熊谷紫蘭
- 華祥　熊野谷涼
- NH　小泉智江子
- 蘭鼎　小板橋さくら
- 筑桜　小口智子
- 椿翠　小林晃代
- 樹原　紺野遊山
- 松村　後藤艶子
- うる　齋賀裕美
- 蒼原　齋田綾子
- やま　齋藤かつえ
- 英峰　斉藤早苗
- 稲毛　斉藤由美子
- 芳蘭　斉藤江彩
- 澄春　齊藤静枝
- 硯水　佐々木雅芳
- 正華　佐藤麻美
- たか　猿渡篁右
- 〃　猿渡冬華
- 玉松　塩澤美紅
- 松村　鹿田世志江
- 千葉　渋谷愛華
- 光昭　嶋由香
- 顧緑　志水由起子
- 澄春　新行内満子
- 土気　杉田祥風
- 秀水　砂川洋子

選外215名氏名略

- 竹扇　高井小秋
- たか　高橋恵泉
- 郷州　宅佳都子
- 有秋　武山花源
- 玉松　田中耶衣
- 安波　千葉紅雲
- 秀畝　筑井宏子
- 竜泉　土谷まつ江
- 大雲　積田雅雲
- たか　樋泉雪篁
- 大阪　徳田萩峯
- 生大　豊田翠玉
- 倉吉　中江みよ子
- 玉川　中澤綾
- 艸玄　中澤雅子
- 洞書　中村寛子
- 正華　永井宏枝
- 小汀　永瀬蓉汀
- 泉会　永田時子
- 白珠　西山裕人
- 高陵　丹羽美恵子
- 詢扇　野村陽詢
- 大阪　橋本都子
- 玉松　橋本紅霞
- 椿翠　橋本日和
- はせ　長谷久子
- 東向　畠山芝香
- 秀水　花里智子
- 上泉　濱田陽一
- 幕張　林玉華
- 大阪　廣地美幸
- 澄春　深堀清洗
- 前橋　別府信子
- 生大　牧野清次
- 澄春　増田華秀
- 高崎　松浦玉江
- 千葉　松重翠景
- 石習　松丸愛石
- 白露　松村陽子
- 墨宣　真庭タケミ
- 玉川　湊妃美子
- 生大　宮下樂翠
- 調布　武藤蕙睦
- 紅苑　茂木真蘭
- 松村　茂木翠芳
- 玉川　森本悦子
- 椿翠　安嶋眞砂子
- 華仙　山口雪翠
- もく　吉種藤玉
- 青峰　吉田光治
- 東実　吉田眞理
- 大阪　六波羅箏玉
- 芳蘭　渡邉信溪
- 白露　渡辺八重子